

交通事故にあいました

去る7月15日夜、所沢市民武道館で剣道の稽古を済ませて川越に帰ってくる途中、信号待ちをしていた時に、4トントラックに**追突**され、**玉突き**で前の車にぶつかり、私の軽自動車は前後がつぶれて大破してしまいました。運送会社の若い運転手でした。高い運転台から**赤信号待ち**の前方の車は見ていたが、すぐ目の下にいる小さな緑色の車は、目に入らなかったと言うのです。

前の信号灯を通過した時、私の車で黄色になったのに、30mは車間距離のあった彼が交差点を突っ切って来ていましたから、嫌なトラックだなと恐れを感じました。しかし一車線の道なので他車線に避難して先に行かせることが出来ませんでした。まさか次ぎの信号待ちの車列に突っ込んでくるとは！

幸い運転座席の空間だけは異常なし。しばらく座っていましたが、**足**を動かしてみたら動くのです。痛みません。**首**もOK。ドアが不思議と開きましたので、外に出て路上に立ってみました。どこも痛みません。すぐ座席に戻り、**救急車**を待ちました。

川越の赤心堂病院に運ばれ、レントゲンをとりました。当直医が「自分は専門外だが、**79才**相応に骨も筋肉・筋も老化しているから、明日朝にはひどい痛みが出てくるだろう。首のサポーターをはずさず安静にして、朝になったら整形外科に来るように」と言われました。

警察署に呼ばれて調書をとられ、午前2時に帰宅しました。朝になりました。首や肩に少し違和感がありますものの痛みはありません。すぐ病院に行きました。3時間待たされました。専門医の診断は「**骨に異常なし**。自覚症状もさしてなければ、しばらく様子を見ましょう。剣道でぶつかり合う衝撃の方が、車の衝突より激しいのでしょうか。**日頃の鍛錬**のおかげですね」と感心されました。

土曜日は教会の牧師にとりましては、日曜日の礼拝の準備で息つく暇もありません。床についたのが明け方でした。礼拝を無事に済ませ、すぐに神奈川県下のふじみ教会の祝賀会に駆けつけ、夜の8時半に帰宅。翌月曜日は、朝7時半に家を出て新潟に出張、火曜の夜帰宅しました。**過密な4日間**でした。そして**水曜日**になって、やっと近所の整骨院に行き、治療を受けることができました。

普段も剣道の稽古後に、週に一回は腰や肩のケアに通っている治療院なので、私の体をよく知っています。「首・肩・腰が異常に固い。余程の衝撃を受けた症状です。今きちんと治療しておかないと、寒くなってから痛みが出ますよ。自覚症状以上に体は痛んでいます」と言われました。よく寝たはずの朝でも眠気が起きます。血の巡りが脳まで十分に廻らないほど**全身が疲労**しているしるしなのだそうです。

以上の経過をたどる間に、先ず第一に私の心に浮かんだことは、どうしてこのような事故に遭いながら、体が無事に守られたのだろうかという**不思議な思い**でした。「これで人生の終りとせず、まだ生きて働く機会を神さまが与えて下さった。これからはもっと**命を大切にしなければ**」という厳粛な気持ちになりました。

気力・体力の維持のためには、週3～4回の剣道の稽古が欠かせません。85才までは剣道に励みつつ、牧師として教会に**精一杯**お仕えしたいと願ってきました。8段の剣士が居られる道場で学びたいので、川越に住みながら、綾瀬・所沢・川口にも遠出するため、車は必需品なのです。

しかし**軽自動車**をやめます。出費を惜しまずに少し大き目の車に代え、ぶつけられても体に不具合が起こる**危険**を出来る限り小さくします。小さな車を乗り回すことで**周囲の皆さんに与えてきた大きな心配**を、九死に一生を得てやっと自覚できました。

静かに瞑想し、祈る時間を増やします。**神さまの霊の力**が、一人一人の方々に直接働いて、その方の内側から力が湧き上がっていくように、**霊の奉仕**を大切にします。宮沢賢治の詩「雨にも負けず」には「東に病気の子供があれば 行って看病してやり、西に疲れた母があれば 行ってその稲の束を負い——」とあります。そうしたいと願って生きてきました。しかし**老い**を受けいれて断念します。そして神さまが老人に与えてくださった、死ぬまで出来る働きをもっと大事にしていけます。

「手は何もできないけれど 最後まで合掌ができる 愛するすべての人の
上に 神の恵みを求めるために 全てをなし終えたら 臨終の床に神の
声を聞くだらう 来よ わが友よ われ 汝を見捨てじ」

(H. ホイヴェルス「人生の秋」)